

養護教諭による中学生に対する表現活動の試みとその効果

山 脇 眞 弓

九州女子短期大学 子ども健康学科

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年11月1日受付、2011年12月14日受理)

要 旨

人間の心身の機能を見ると、見る、聴く、話、歌う、描く、書く、踊るなどがあげられる。それは目で見、心で聴き、思いのうちを語り、そして歌い、あるいは描き出し、書き出し、体全体で舞うなどの身体機能のはたらきが統合され、表現行為として行動化されるものである。そこでは、感情、感覚、イメージの形成、言語、意識、無意識、身体運動など、心理学的、精神医学的、生物学的、脳機能学的など関連を持っている。このように、表現活動は医療活動に深く関連があり、心理面で生かされることは可能である。

この粘土の素材は、芸術療法や心理療法において身近な素材であり、多くのものが、個人やグループでの治療における治療過程を進めるためのツールとして、粘土の持つ潜在力を提唱している。(e.g. Anderson, 1995) また他の者は、家族療法や個人療法における粘土細工が診断に利用できることを述べている。(e.g. Jorstad, 1965) 粘土細工には、何か物に触れることでの強烈で力強い触覚経験が伴う。「触れるという行為は、人間を発展させるための最初の感覚反応の一つである。(Montagu, 1978)」と各研究者も言っている。しかしながら、この粘土の素材のもたらす集団における心理的・教育的効用については、いまだ十分に研究されていない。

現代の中学生の現状は、思春期に入り、親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに、自意識と客観的事実との違いに悩み、様々な葛藤の中で、自らの生き方を模索しはじめる時期である。また、大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意味を見いだす。さらに、親に対する反抗期を迎え、親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の心理状態はとて不安定で、この不安定が「揺れる中学生・荒れる中学生」を生み出しているといわれている。

このような中学生へ、養護教諭が粘土作業を通して、心の中にある不安や怒り、葛藤や悲しみなどの心の不安定さを粘土作業により表現させ、さらに将来への夢や希望をもたせることにより、生活環境や学習環境に低迷している中学生が「落ち着きのある集団づくり」と「情緒の安定」を取り戻すことができた。

緒言

人間の心身の機能を見ると、見る、聴く、話、歌う、描く、書く、踊るなどがあげられる。それは目で見、心で聴き、思いのうちを語り、そして歌い、あるいは描き出し、書き出し、体全体で舞うなどの身体機能のはたらきが統合され、表現行為として行動化されるものである。ここでは、感情、感覚、イメージの形成、言語、意識、無意識、身体運動など、心理学的、精神医学的、生物学的、脳機能学的など関連を持っている。このように、表現活動は医療活動に深く関連があり、心理面で生かされることは可能である。

○ 表現活動

芸術療法とは、Arts Therapyとも言われている。「なぐり書き」や「ぐにゃぐにゃ書き」「独り言を言いながら空想の世界を書いていた「お絵書き」、夢中になって遊んだ「泥遊び」や「砂遊び」、いろいろなものになって遊んだ「ごっこ遊び」、思春期にそっとノートに綴った「詩」などがあげられる。

芸術療法では、完成品としての作品の意味よりも、その作品を作ろうとする過程で「心」の中で起こる、様々な感情の流れや心の変化を表現していくことが重視される。このことについては、「患者にとって自然に浮かんでくるイメージを描いていくことは、ほとんど常に自分の人格のもうひとつ別の面を呼び出すことにつながるようである。そこに現れた他者性は、その人自身のものに間違いなく、意識的自我と向かい合う人格の隠れていた側面の発見は、まことに驚くべき体験であろう。これが自分のイメージと対話するということが、非常に大切なこととなりうる理由である。」とジェームズ・ヒルマン (James. Hillman, 2006) も論じている。

ここでいう表現活動とは、芸術療法の中の一つで子どもたちが幼い時から遊びの中で親しんでいる泥んこ遊びやお砂遊びである。その遊びの素材を粘土に変え、幼い頃の思い出や遊びを再体験させることによる心の変化を観ることにした。

表現活動は、粘土でイメージを作る、素材を通して心を表現する、心の動きやありようを映し出すなど、一連の動きの中で何かを感じ、何かを体感する活動だと捉えている。その何かを通して自分の心の様子を赴くままにイメージ化し、そのイメージを作品の中に投影することで自己の内面と語り合う作業だと考えている。

○ 粘土の特徴と自己理解

ここで使用する粘土には素材のもつ多様な特徴がある。粘土は、順応性のある三次元の媒体で、形態を変えることができ、新しい部分を加えたり、取り去ったりすることもできる。また、色を塗ったり、他の多くの材料と組み合わせたりすることもできる。塊を細かく分割させ多種多様なものに変化させたり、くぼませて器にしたり、さらにもとの形に戻すことも容易な素材である。粘土を扱う触感から、身体の緊張をほぐすことができ、感情を穏やかにすることができる。さらに指先から伝わる感触は、心をリラックスさせ、自由に心と向き合

うことができ、今の心の様子を表現することを助けることができる。粘土は、安心感や安らぎ感、攻撃性や過度の自己防衛、逃避や無気力など、意識化された心の様子と心の奥にある意識化されていない（無意識）心を、自己の中で徐々に明確化し認識できるようになる。その心の様子や気持ちの変化を客観的に受け止めることができると考えている。様々な心の様子を表現できる粘土は、今の思いをリセットして、もう一度作り直すことができる再生可能な素材である。活動中に起こる様々な心の変化や感情の流れを、「繰り返すつくり直す」ことができる素材でもある。さらに粘土の素材が指先から伝わる感触や触感からはカタルシス効果があるとも言われている。

○心を誘導する音楽の効果性

ミッチェル (Michel, D. E., 1979) が指摘するように「音楽療法の完璧な定義は存在しない。」と言っているが、アルヴァン (Alvin, J., 1982) は、「音楽療法とは、身体的、精神的、情緒的な患いをもつ子どもや成人の治療、リハビリテーション、教育、訓練における音楽の統制的活用である。」と定義し、長年にわたり英国の基準とされてきている。

レスリー・バンド (Leslie, Bund, 1996) は、「音楽療法は、クライアントとセラピストとの間の発展的な関係の中で音と音楽を活用するものであり、クライアントの身体的、精神的、社会的、情緒的充足を支持し、促進することを目的にする。」と定義している。

日本では、終戦直後に「環境音楽」BGM (back ground music) が米国より入ってきた。戦時の生産力増強のために英米が研究をして普及させてことに始まった方法である。やがて「BGM療法」というコンセプトまで広がっていった。しかし、当時の音楽家たちは、「音楽は誠心誠意心を傾けて集中して聴くべきものなので、ながら的に聴くのは失礼きわまりない。」ということから音楽療法は普及しなかった。

研究の経過

文部科学省初等中等教育局児童生徒課が提言している「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」の「子どもの発達段階に応じた支援の必要性」の中で、小学校高学年期の児童の課題は、「現在の我が国における小学校高学年の時期における子育ての課題としては、インターネット等を通じた擬似的・間接的な体験が増加する反面、人やもの、自然に直接触れるという体験活動の機会の減少があげられる。」さらに小学校高学年の時期における子どもの発達において重視すべき課題は「・抽象的な思考への適応や他者の視点に対する理解・自己肯定感の育成・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成・体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり」などがあげられている。

中学生の課題としては、「思春期に入り、親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに、自意識と客観的事実との違いに悩み、様々な葛藤の中で、自

らの生き方を模索しはじめる時期である。また、大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意味を見いだす。さらに、親に対する反抗期を迎え親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の課題が現れる。また、仲間同士の評価を強く意識する反面、他者との交流に消極的な傾向も見られる。性意識が高まり、異性への興味関心も高まる時期でもある。」と提言されている。

筆者は以前養護教諭をしているときに、K市立教育センターの研究員として、中学生に粘土による表現活動の実践教育を行っていた。この研究のきっかけは、保健室を訪れる生徒の中で心理的な訴えが多く、自己の思いを言葉で表現することにためらいを感じている生徒が多かった。そこで、心を表現する手立てとして、絵画、コラージュ、折り紙、粘土遊び等取り入れてみた結果、粘土作業が生徒にとって好評であり、多くの生徒が保健室の紙粘土で遊んでいた。生徒が感じていた粘土の面白さは、何度も思いに合わせて作り替えることができ、自分の作品をオブジェとして飾るか、ぐちゃぐちゃにして壊すか、元の形に戻すかがその時の気分で自由に選択ができる。作っているときの様々なことが思い出されて、多くのことを思い出すことができた。時々つらいことも思い出すが、あの時のことを今では懐かしく思えるなど、粘土作業を通して生徒と養護教諭が会話へとつなげることも多かった。そこで、この粘土作業を保健指導の中に取り入れ集団指導を行い、その効果性について研究を行った。

まさに小学校から中学校へと体の成長とともに心も変化し、この時期の子どもたちの心理状態はとても不安定で、この不安定が「揺れる中学生・荒れる中学生」を生み出しているといっても過言ではないだろう。

生徒の実態と研究の必要性

K市立中学校実態から、生徒に表現活動が必要な理由として、生徒を取り巻く環境が挙げられる。

生活環境は、十代の結婚や出産率が高く、兄弟姉妹の数が多し。若年同士の結婚率が高いこと、離婚率が高いことも特徴であり、近隣の地域に比べ母子家庭や父子家庭が多い。さらに、市や国から生活援助を受けている家庭が生徒全体の60%を上回り、保護者は生計を立てるために、昼間、夜間の仕事を掛け持ちしている親も少なくない。そのため、保護者の帰宅は夜遅く、子どもの面倒は兄弟のみでみていることが多い。家庭の教育力は低く、小学校に入学するまで、自分の名前を書いたことや、本を読んだことがなく、未経験のために学力低下を余儀なくされているなど、生活環境から波及した課題が大きい地域である。

生徒たちは、幼いころより忙しく昼夜働く親を見てきており、親とゆっくり過ごす体験が少なく、過度の嫉妬のため、たびたび身体に怪我をしていることもある。さらに言動が粗野粗暴であり、攻撃的な面もあるが、非常に情にもろく義理堅い一面も持っている。

学校の様子は、個人差はあるが生徒自身感情の表出の仕方がとても下手で、人に対する思

いやりや優しさ、気遣いなど、自分の感情をうまく表現することが苦手な生徒が多い。そのため、相手に自分の気持ちを上手に伝えることや、相手の心の様子や感情、その場の状況などを汲み取ることができず、些細なことでトラブルを起こしてしまうことも多々ある。

さらに、2つの小学校から中学校に上がってきているが、一つの小学校では学級崩壊を経験しているため、教師や大人に対する不信感が強く、社会のルールや学校生活の決まりを守ろうとする意識も希薄で、小学校の時から教師に対する反発や不信感、嫌悪感を態度や言葉で表すなど、学校教育の基礎である信頼関係が築けていない面もある。

中学に入学後は、対教師暴力が頻発し、授業中に職員室へ教室からの緊急電話が頻繁にかかってくる。校内では生徒がグループで徘徊し、いたるところで喫煙の跡がみられ、学校教育の基礎が成立していないといえる状況にあった。

そこで、このような現状にある中学生に粘土作業による表現活動を行うことで、芸術療法でいわれている心への効果が検証できるのではないかと考え、本研究を試みることにした。

調査方法

1. 対象

K市立中学校に平成14年4月に入学した中学生（2クラス、52名）。

2. 実施月日と活動の概要

平成15年11月（2年次）から平成16年10月（3年次）まで、粘土による表現活動を実施した。

粘土による感情表現はテーマを決め4回実施した。

○1回目 平成15年11月20日実施

- ・快感情を表出させる テーマ「自分の心を見つめてみよう」
- ・音楽「もののけ姫・再生」

広い草原にさわやかな風が流れ、生命の息吹を感じさせるような静かなメロディー。

○2回目 平成16年1月21日実施

- ・不快の感情を表出させる テーマ「自分の心の中にある怒りを表現して見よう」
- ・音楽「もののけ姫・祟り神」

戦いのシーンに使われている音楽で、迫り来る恐怖を感じさせるようなメロディー。

○3回目 平成16年7月7日実施

- ・愛を表出させる テーマ「自分の中にある『愛』をイメージして表現して見よう」
- ・音楽「Pure・ヘイリー」

森の中に光が差し込み、凜とした自然を感じさせるソプラノの歌声。

○4回目 平成16年10月22日実施

- ・夢・希望・未来を表出させる テーマ「これからの夢や希望に向けて、表現してみよう」

・音楽「CUSCO・クスコ ズイルマン2000 アフリカーアフリカ」

南米やアフリカの奥地など、地球最後の楽園をドキュメントにしたTVシリーズのサントラ盤で、壮大な大草原の中で、ゆったりと時の流れを感じるように情景が浮かんでくるようなメロディー。

3. 方法 (活動の詳細)

(1) 粘土の選択

粘土の素材の特徴を生かしながら、心の奥にある意識化されていない心の様子、安心感や安らぎ、攻撃的な心、過度の自己防衛をする心、逃避する心、無気力な心など、様々な心の中にある不安や葛藤を意識化させるための橋渡しとして使用する。ただし、油粘土は、油の臭いが気になり、使用すると油性が手に残るため神経質な生徒は活動意欲が低下することも考え、紙粘土(重さや感触が違うもの3種類)と焼き物用の粘土、木の粘土など5種類の中から自由に選択した。

(2) 感情表現の素材

感情をよりリアルに表現するための粘土以外の素材として、日常生活の中で身近にあるものを各種用意した。

多種多様な形のおはじきやビーズ・ビー玉やタイル、カラフルな砂、色々な形や長さ・大きさの釘、いろいろな種類の画鋸、爪楊枝や竹串、太さの違う針金、包装紙、色々な紐、紙・布テープ、モール、ポプリ、サンドガラス、貝殻、ポスターカラー20色、粘土へらなど。

(3) 表現活動の条件付け

①手や指先の感覚の覚醒とリラクゼーション

・活動開始前5分を利用し、生徒全員で毎回行った。

②音楽による感情誘導

・課題を想起しやすいように教室の中で、自由な姿勢で音楽を聞く。頭の中に情景や思い出がよみがえり、より具体化したイメージを発想することができた。

③活動条件の同一化 表現活動は、以下の条件で4回実施した。

- ・教科：総合的な学習の時間。
- ・時間設定：午後5・6校時(2時間連続)。
- ・部屋：多目的ホール。学年全員(52名)が一部屋に収容できる広さ。
- ・机：長机を使用し同じ机に2人掛け。一つの机に男女1名ずつ、出席番号順に前から座る。
- ・椅子：教室で使用している自分の椅子。
- ・服装：体育服上下。必要に応じてエプロン・タオル。
- ・筆記用具：振り返りカードや心理テスト等の記入用。
- ・活動：60分間、無言で粘土と心の対話。
- ・音楽：感情誘導、活動時間中流す。

4. 測定尺度

- ① 表現活動に対する自己評価（テーマごとに4段階評価の質問を3問実施した。）
- ② 表現活動に対する振り返りカード（活動直後に感想文を書かせた。）
- ③ エゴ・グラム 平成14年6月から3年間実施
- ④ YG性格検査 平成15年9月と平成16年11月実施

結果

1. 手や指先の感覚の覚醒とリラクゼーション

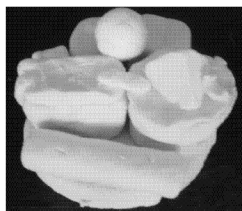
毎回、表現活動の開始前に5分間、すぐに粘土に触れるのではなく、自分の気持ちを表現しやすくするための指先や手の筋肉をより柔らかくし、手や指先に粘土の感触が伝わりやすいように感覚を研ぎ澄ますためのリラクゼーションを取り入れた。

- ①手の平や指先をすり合わせる
- ②指を組み合わせる
- ③指先をマッサージする
- ④指先を感じる

2. 生徒が作成した作品とその時の心の様子

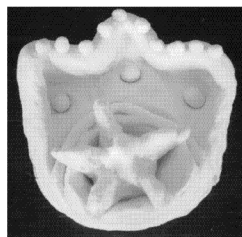
- ① 1回目 快感情を表出させた作品と生徒の感想（平成15年11月20日）

テーマ 「自分の心を見つめてみよう」



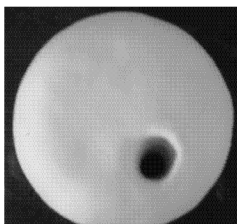
作品1 「積み木の島」

この島には、円や三角や四角など立体的なものがあり、大きな箱が真ん中に2つあります。中には何かが入っています。この島は、時々雪も降ってきます。



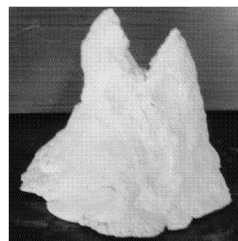
作品2 「卵の寝室」

静かな音楽だったので、静かな場所を思いついて「寝室」かなと思いました。ただの寝室だったらおもしろくないので卵をつけました。



作品3 「丸」

ただなんとなく丸を作っていたらおもしろいなーと思って穴をあけた。手触りには自分がある。(笑)
他は何にも考えてなかったのわかりません。自分の中の嫌な部分とか、そんな感じで作った。



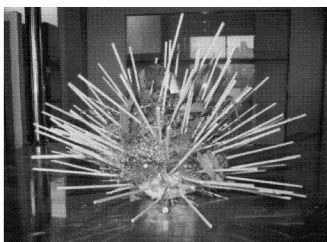
作品4 「山」

春がきて雪が解け始めている山です。ふわふわとした雪とゴツゴツとした岩山を粘土で作りました。とっても山らしいですよ。

1回目、ほとんどの生徒は、小学校の時に粘土に触れる経験はあったが中学校では久しぶり粘土に触れることになった。粘土を手の平に取り、しばらくの間慈しむように粘土を撫で、作業を始めていた。

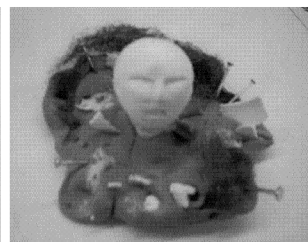
② 2回目 不快の感情を表出させた作品と生徒の感想 (平成16年1月21日)

テーマ 「自分の心の中にある怒りを表現して見よう」



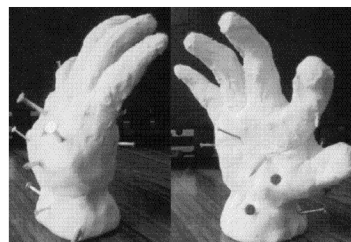
作品5 「自由」

- ・何も考えずに作った。
- ・人の運命や関係ない人が苦しんだりすること。



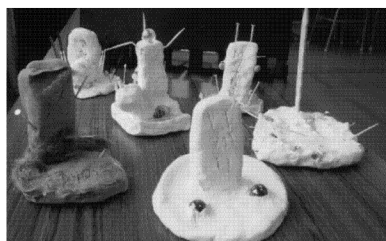
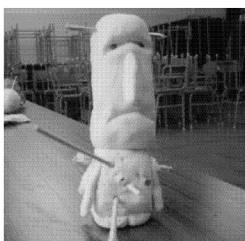
作品6 「生首」

- ・人がもがき苦しみながら死んでいく様子を想像しながら作った。
- ・嫌いな友達を殺したいけど人殺しになるので、交通事故かなんかで死んでほしい。



作品7 「めった刺し」

- ・本当に手に刺さったら痛いだろうなと思って作った。
- ・自分自身がいやなこと。



作品8 「怒つとる人」
独りでいる悲しい気持ちでつくった。

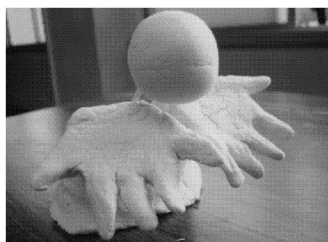


2回目は、生徒も粘土で表現することに少し慣れてきた、テーマが怒りだったので、感情を表現しやすく、感情を表質するその他の素材の活用も多く、特に、尖ったもの、細く長いもの、画鋸や釘など、先が鋭いものなどを、突き刺す、埋め込む、外に剥き出すなど怒りの感情の矛先を内向的化外交的化、さらには自己の中に封印するかなのような作品を作っていた。

怒りの表現として、物が突き刺さるものも多く、作品は、複雑なものは少なく単純なものも多く、お墓や人形も多かった。そのときの生徒の様子は、とても真剣に粘土と向き合い、一生懸命作業に取り組んでいる姿がとても印象的だった。

③ 3回目 「愛」表現させた作品と生徒の感想（平成16年7月7日）

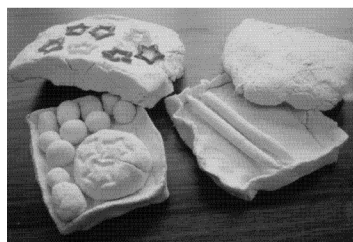
テーマ 「自分の中にある「愛」をイメージして表現して見よう」



作品9 「・・・」
愛を渡す側の人を表現しました。



作品10「俺の文字入りおにぎり」
俺が時々作る愛情いっぱいのおにぎり。感謝の気持ちを表しています。



作品11「お母さんが作ってくれたお弁当」
いつも朝忙しいのにお弁当を作ってくれるので、いつもありがとうという気持ちで作った。

3回目のテーマが「愛」だったので、生徒の感覚としては表現しにくいテーマだったように思われる。作業に入る前に、愛とは男女の関係性だけではなく、「与える愛」「与えられる愛」があることや、日常生活の中で、いろいろな形の愛があることを想起させるように作業に入る前に話をした。

筆者の予測に反して、「食」に関するものから愛を感じている生徒が多かったことは意外だった。その中に家族への感謝の気持ちを「お弁当」や「おにぎり」に表現した生徒がとても印象的だった。

④ 4回目 「夢・希望・未来」を表現させる作品（平成16年10月22日）

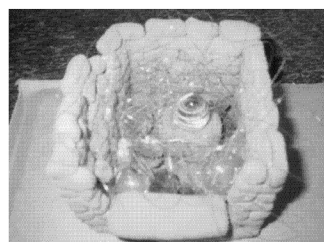
テーマ 「これからの夢や希望に向けて、表現してみよう」



作品14「わしづかみ」
よくがんばった。



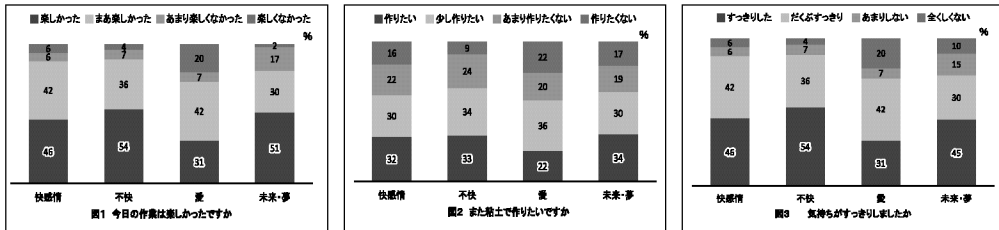
作品15「植物や動物と共存する」
共存できたらいいなと思って作った。



作品16「質屋」
今までの思い出、卵はこれから・・・。しゃぼん玉は思い出。

4回目では、粘土による作業は今回が最後だと生徒に伝えた。これからの自分の将来について自分自身がどう考えるか、進路に対する夢や希望、なりたい自分を想像するなど、多くの可能性と未来があることを意識させ、粘土作業を行った。その結果、自分の未来に対する希望や思い、高校受験を迎え気持ちの焦り等、作品に込められた思いをコメントから読み取ることができた。

3. 粘土による表現活動に対する自己評価



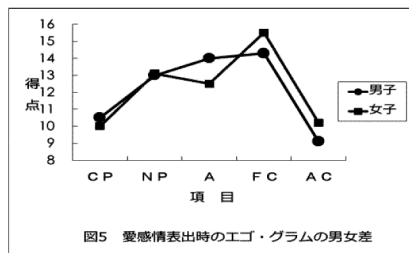
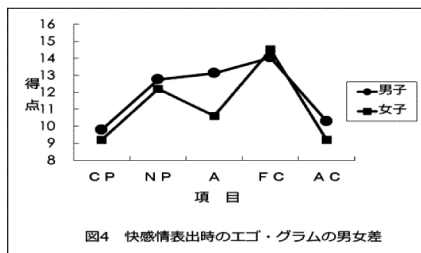
粘土作業後に、質問項目の3項目を4段階で自己評価した。

- 快感情（1回目）の粘土作業の結果、88%の生徒が久しぶりに粘土を扱い粘土による今日の活動は楽しかったと回答している。楽しかったと感じた生徒の中に、「どうして、中学生が粘土遊びをするのか。と感じたが、活動が終わった時に、こんなに面白いとは思わなかった、またしたいと思った。」と感想を書いていた。
- 不快感情・怒り（2回目）の粘土作業の結果、90%の生徒が、今日の活動は楽しかったと感じており、91%の生徒が、気持ちはずっきりしたと答えている。4回の表現活動の中で、真剣に取り組んでいる生徒が一番多かったテーマでもある。
- 愛（3回目）の粘土作業の結果、数値が全て低く感情を表出しにくいテーマであったと考えられる。
- 夢・希望・未来（4回目）の粘土作業の結果は、81%の生徒が粘土による表現活動が楽しかったと思っていた。

4. エゴ・グラムの結果

4回の表現活動の実施後、エゴ・グラムを取り生徒の心の様子について実態調査を行った。

表現活動前から活動終了まで、生徒一人ひとりの心の動きをエゴ・グラムで測定した。その結果、快感情と、愛のテーマで粘土作業を行ったときに、A（アダルト）の数値に男女の差が現れたが、事前に行った調査との数値による差が無いことから、エゴ・グラムによる感情の変化はほとんど見られないことが分かった。



そこで、粘土による表現活動を継続的に行うことによる効果性をみるために、活動前と活動後をもとに t 検定を行った結果、FC に有意差があった。さらに、対応のある一要因の分散分

析 (ANOVA) を3回目と4回目と事後にした結果、AとFCに有意差が認められた。

5. YG性格検査の結果

平成15年9月分と平成16年11月分とを比較したが、プロフィールの変更は見いだせなかった。

考 察

生徒に心の教育が必要と考えたのは、4月に入学後の生徒の様子を見た時だった。小学校で学級崩壊を体験している生徒は、心の傷をいろいろな形で深く残していた。特に学校生活の規律やルールを守ることや教師を信じることに抵抗を示し、攻撃的な言動がいたるところで見受けられた。教育の立て直しや学校のルールを教育することに模索したが、最終的に生徒が心を開いたのは、互いの信頼関係だった。総合的な学習の時間をフルに活用し、中学1年生から3年生まで、学年の教育目標を「生命」として、行事を通して育てて行くことを学年教員の共通理解とした。

4月の入学時から1年半の時間を費やし、生徒と教員の人間関係性づくりを主に行っていた。2年生の2学期に入り、生徒による対教師暴力や学校内での徘徊、生徒間のトラブルなど依然と発生はしているが、その頻度や程度は少しずつであるが減少傾向にあった。そこで、筆者は、教師と生徒の関係性はかなり良くなってきていると判断し、さらに関係性を深めるための活動を集団指導から個別指導に切換え、自己理解を深めるための作業と活動を取り入れることにした。

粘土作業は、生徒にとって粘土で遊ぶお遊びだと認識し、活動が成り立たないのではないかという不安はあったが、粘土作業を総合的な学習の時間の中に位置づけ、教育の一環として表現活動を行うことを生徒に周知徹底し実践していった。諸論で記載している「粘土の効果」や「音楽による心の誘導」、「粘土を使う目的や活動方法」など、学年や学校全体の教師の理解を得て、実施会場から機材に至るまで準備し実践することができた。

表現活動は授業の一環であるということを教師や生徒に説明し、授業の導入には、「人間の心には4つの領域がある」という1955年にアメリカの心理学者ジョセフ・ルフトとハリ・インガムが開発した対人関係における気づきのグラフモデル「ジョハリ (johari) の窓」について分かりやすく説明をし、自己の心の様子を粘土作業を通してゆっくりと見つめていく活動をするを知らせた。

ある生徒は、「最初、どうして中学生で粘土遊びなん。なんでとおもったが、粘土を扱って、ものを作っていると、こんなに面白いとは思わなかった。またしたい。」と活動後に養護教諭に話に来ている。

2回目に行った怒りの感情の表出では、「自分の中に、怒りや悲しみ、どうしようもない思

いや攻撃性がわき出てきたことに自分でもびっくりした。さらにそれを形にしてみると、周りで作っている友だちも同じようなものを作っていたのに驚いた。」「音楽に迫力があって、追われているようで怖い感じがした。自分の中にある何かが刺激され、今まであまり考えていないことをいろいろと思い出したので、そのことを考えながら作った。」など、活動後の生徒との会話や感想文に表現されていた。

怒りの感情の表出は、生徒一人ひとりがとても真剣に取り組んでいる姿が一番多く見られた。作品は、複雑なものは少なく単純なものが多いが、感情をより具体化するために粘土以外の素材やペイントを使用し、粘土だけでは表現しにくい感情の強弱や激しさを他の素材から観ることができた。

本校の生徒は、日ごろの言動から幼少期から愛情豊かに育てられた経験が乏しいように感じられる。そのため、3回目の愛は表現しにくいテーマでもあった。経済状態や生活で十分に満たされていない愛を「食」に変えて表現をしていた。特に食が人に与える影響や食にまつわる人間関係等について、考えさせられるような内容が多かった。特に愛をテーマにして感じたことは、生徒のイメージには、過去の経験や体験が重要な役割を果たしており、そこから温かい感情や慈しみなど他人に呈する思いも派生してくることが分かった。

4回目のテーマは、中学校に入学し現在までの15年間ではあるが、生徒一人ひとりがいろいろな状況の中で精いっぱい生きてきているその総まとめとなる最後の作品作りで、自分の将来について考え、粘土による作業も今回は最後だと確認し、作品を通して今まで生活してきた想いを見つめていった。

表現活動終了後の生徒全員の感想

「自分は成長したと思う。理想の自分が見えてきたように思う。よかった、うれしかった、悲しかった、怖かった、感動、いろいろな思いを体験することができた。自分が本当に成長したと思う。」

「粘土作りをして気持ちが落ち着いた。ありがとう。」

「楽しかったし、とてもすごいものができたと思う。」

「精神的な支えになりました。粘土はなんとなく良かったです。3年になって、学校のこと、自分のことが良くわかった。ありがとう先生。」

「自分の思っていることを粘土に表すのは、とても楽しかったです。」

「最初は中学生で粘土と思っていたが、やっている内に案外面白かった。」

「心の勉強のおかげで、なんとなく自分を見つめ直した。ありがとうございます。先生またしよげ。」「粘土のおかげで、いろいろな気持ちを表すことができるようになった。ありがとう。」

「粘土を作ったことで、気持ちが落ち着きました。」

「粘土作りで、気持ちが少し楽になりました。」「思い出になったよ。最高に楽しかったよ。」
「粘土を使って自分の心を表現できることで、心を自由にさせていただきました。本当に成長したと思う。僕がんばるよ。強くなるよ。」
「今日で最後の活動だったけど、「自分の夢」というテーマでとてもいいものができた。」
「粘土作りは楽しかったけど、表現するということは難しいなあと思いました。」
「粘土作りを、また機会があったらさせて欲しい。」

生徒の感想から、粘土で物を作ることに幼稚な作業で、どうしてこんなことをするのかと疑問や不信をもちながら行っていたが、粘土の素材を通した表現活動は、自分の自由な心の状況を表現することで、自分の中にある何かを見つめることができ、どうしてだかわからないが自信がもてるようにもなり、自分や友達を認める心が芽生えてきて、自分の可能性や未来が回を重ねるごとに見えてきた。自己肯定感も高まり、多くの生徒から笑顔が見られるようになり、教師や友達との関係性も良くなり、生徒同士に気遣う姿が観られるようになった。さらに、対教師暴力や友達同士のトラブルもほとんど起こらなくなった。

このように、思春期におけるコミュニケーションの中で、従来の言語的コミュニケーションとそこでの粘土作業の果たす特別な役割を比較した質的研究において、Graziano (1999) は、象徴的な粘土作品が主観的な意味のより深いレベルを表現していることを見出した。それらは発達の問題や思春期の関心事と関連付けられた。制作された粘土によるシンボルは、所有、不可思議、わな、完全性、復讐、それにばかばかしさといったものについてのより深い水準での意味を表現していた。多くの報告が、粘土作業は治療者に対して多くのことを物語るコミュニケーションとしての機能があると述べている (Elkisch, 1947)。

表現活動が終わり、学年全体の大きな変化は日常生活の中に現れてきた。

今まで自分の目の前にごみがあってもだれも拾うことはなく、ごみ箱をひっくり返したような中でも平気で生活していた生徒たちが、進んで掃除をするようになった。落書きやトイレの便器が割られて、鏡は危ないから置けないと取り外していたトイレも、毎回きれいに掃除がしてあり床は水を流しきれいにされている。いたるところに落書きをしていた教室もきれいになった。学校生活での決まりやルールが守れるようになり、朝のホームルームにほぼ全員の生徒が教室にいて、朝自習をしている姿がみられるようになった。授業中に寝ている生徒がほとんどいなくなった。特に大きな変化は、なんとなく私立高校へ進学をしていた生徒が、県立高校を目指し、みんなで勉強をしようという意識が起り、教え合い学習ができるようになった。自分の将来を真剣に考えるようになり、進学ができない生徒たちが受験する友達を応援するようにもなったことである。

このように、粘土による表現活動は、自分自身をみつめ、自分を深く知ることができることにより、心の安定を図ることができるようになっただけでなく、確実に個人が成長してといえる。これらの結果から粘土の素材は、中学生の心の様子を出し表現させる表現活動

が有効であり、この活動をとって、情緒を安定させ、落ち着きのある集団づくりに効果があることがわかった。この研究結果から、養護教諭が行う表現活動は、思春期の子どもにとって効果があり有効であるといえる。

調査対象の中学生は、厳しい生活環境の中で常にたくましく生きている。生徒一人ひとりを見ると、生育した環境さえ整ってればこの子は別の人生を歩いていただろうと考えさせられる。この粘土による表現活動を通して、生徒一人ひとりが自己の可能性に気づき、将来について深く考えるようになり、未来に向けて自分の希望を語れるように変化したと結果から検証できる。今後もこの研究をさらに深め、揺れる中学生の心の教育をより深めていきたいと考えている。

引用・参考文献

- ・ Alvin, J. 1982 Free improvisation in individual therapy. ” in British Journal of Music Therapy, Vol. 13, no. 2 p 9-13 p40
- ・ Anderson, F.E. 1995 Catharsis and empowerment through group claywork with incest survivors. The Arts in psychotherapy 2(5)413-427
- ・ Frank, L.K. 1957 Tactile communication, Genetic Psychology Monographs, 56, 209-255
- ・ C. ケイス, T. ダリー 1997 芸術ハンドブック 誠信書房 P 6. 7～ p10・11 p 66
- ・ 樋口和彦・岡田 康伸 2000 ファンタジーグループ入門 創元社 p33 p 82～87
- ・ 弘中 正美 2002 遊戯療法と子どもの心的世界 金剛出版
- ・ J. アルーパービン 2001 芸術療法の理論と技法 誠信書房 p122 p124・125
- ・ James. Hillman 2006 臨床心理学 vol. 6, No. 4 金剛出版
- ・ ジョエル・ライス・メニューヒン 2003 箱庭療法 ～イギリス・ユング派の事例と解釈～ 金剛出版
- ・ こころの科学92 2000 日本評論者出版 p 9
- ・ 河合 隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- ・ キャシー・マルキオディ 2002 被虐待児のアートセラピー ～絵からきこえる子どものメッセージ～
- ・ Michel, D. E 1979 Music and Self-esteem Research with Disadvantaged, Problem Boys in a Elementary School.” in Journal of Music Therapy, vol. 7, no. 4, p. 124-127
- ・ 室 淳子 石村 貞夫 1998 Excelでやさしく学ぶ統計解析 東京出版
- ・ ナタリー・ロジャース 2000 表現アートセラピー ～創造性に関われるプロセス～

誠信書房

- ・山中 康裕 1998 表現療法 岩崎学術出版
- ・レスリー・バント 1996 音楽療法 ～ことばを超えた対話～ ミネルヴァ書房
p 1～21
- ・櫻林 仁 1996 音楽療法研究 第一線からの報告 音楽の友社 p 13～39
- ・杉田 峰康・新里 里春 1995 交流分析とエゴ・グラム チーム医療
- ・杉田 峰康 1998 教育カウンセリングと交流分析 チーム医療
- ・櫻林 仁 1996 音楽療法研究 ～第一線からの報告～ 音楽の友社 p 13～39
- ・徳田 良仁・山中 康裕 1998 芸術療法 理論編・実践編 岩崎学術出版社
p 11・12
- ・植木 清直 2002 交流分析の読み方と行動処方 鳥影社

Attempt and effect of expression for junior high school student by School—Nursing

Mayumi YAMAWAKI

Associate Professor, Department of Childhood Care and Education,
Kyusyu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

In school, the health education and care that aims at personality forming of junior high school student is special areas for school nurses.

This study was attempted the expression activity from the point of view of "There might be some effects in working of student's mind" in junior high school students who existed in growth and the developing process as one of the health counseling activities by school nurses .

So, I was made junior high students to experience the expression activity with clay.

As a result, by introducing the characteristic of clay and the effect on music, this expression activity produced the decline of aggressiveness and the stability of emotion and formed calm group.

In addition, the class was formed a settled state, the student-teacher relationships was improved also then before, teachers didn't guide and attention to students and class changed into a calm state.

The effect of the expression activity with this clay was able to be verified according to each result of the survey.

Through a material, clay, the activity of the junior high school student expresses a mind surfaced the inner side of and gradually changed a state of mind.

This activity can be effective for an adolescent junior high school student.

Key Word : School—Nursing, clay, junior high school student